十字の時計

栖納 赦音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十字の時計

【Ｎコード】
Ｎ０４３０Ａ

【作者名】
栖納　赦音

【あらすじ】
「私はアイラ様に興味が湧いたので、また来ます」
牢屋に閉じ込められて誰にも愛されない姫、アイラ。
そんな時、彼がやってきた。

始まりのお話

このお話はずっとずっと昔のお話です。

＊＊

「アイラ。こちらへ来なさい、アイラ」
静かな、閉ざされた牢の中で私は返事をする。
目の前にいるのは、ピンヒールを履いた化粧の濃い女性だった。
「はい。何でしょう？」
「まだ生きていたのね。しぶといわ。今日はあなたに人を紹介しにきたのよ。あなたのお父様はなんて優しいのでしょうね！」
うるさい女だ。もういいでしょ。ほっといて！
「はい。とても嬉しいです」
表情は固いままで、知っている限りの丁寧な言葉を並べる。
「つまらないわね」
底意地の悪い笑みを浮かべたまま、彼女は後ろを振り返って手招きをする。
彼女は、私の言葉なんか耳に入っていないようだ。
「おいでなさい」
ぞっとするような、艶のある声を聞き、私はこれから起こることに恐怖した。いままで、彼女が何かするときに、私が無事にいられたためしは無い。
「失礼します」
私でも、彼女でもない、第三者の声がした。
ぬっと、薄暗い闇の中から一人の男が現れた。
「ナシカと申します。どうぞ、おみしりおきを」

デカブツカタブツどっかいけ。

アイラより二つぐらい年上だろうか。童顔で、金髪に真っ青の瞳をもち、背は１７０センチぐらいだろうか。ただ笑いもせず、簡単な形式上の言葉を発する彼に、アイラはため息を吐いた。
「私は忙しいから失礼するわ」
そう言ってあの女は姿を消した。決して口元の笑みは消さない彼女に、体が冷えていく。何がそんなに楽しいのだろうか。私の不幸？　これから起こることへの期待？
それに、彼は一体何者なのだろう。
不安からか、先に話しかけたのはアイラだった。
「ナシカ様は、どうして私のところへいらしゃったのです？」
正直、別にどうでも良かったけれど。どこかの軍人であるだろうことは、おおよそ想像がつく。
「あの……。私はアイラ様、貴女の婚約者なのですが」
ナシカは怪訝な顔をして、そう答えた。
「え！？」
これにアイラは驚いた。初めて会う人が婚約者で軍人で……。私は、どこまでイジメを受ければいいのだろう！？
「もしかして知らなかったのですか？」
「はい」
彼は、私の言葉を聞き、真っ青になった。

オコッテイル？

アキレテイル？

ワタシヲナグル？

「アイラ……様……」
どうして、そんなにも悲しげなのだろうか。

「あなた様は私に愛していると言えますか？」
「え……」
「私は言えません。そして貴方も言えないと思います」
私は愛されたことなどあったのだろうか……？　そんな人間が人を愛せるわけが無い。
昔読んだ本のお姫様は、可愛く幸せそうだったけれど。優しいお父様に、素敵な王子様。そんな夢物語を、私は得られるなんて思ってない。
すると彼は声を出して笑いだした。
「え……！？」
これが笑顔というものなんだろうか。アイラはなんだか恥ずかしくって頬を膨らませた。
「強気な女性は好みですが……」
「はあ！？」
いきなり爆弾発言をされ、もともと対人に対するキャパシティが高くないアイラは、混乱に陥った。
「ではお聞きしますが、アイラ様は愛していると言われたいのですか？」
そんなこと……。アイラが答えられずにいると、ナシカはふと優しい笑みを漏らした。
「わかりません」
でも、求めている気がした。ナシカが笑ってくれると、胸の奥がきゅっと締め付けられる気がした。
それは同時に、絶望でもあった。
「もう、会うことはないでしょう」
「何故ですか？」
「何故って…」
父は、あの女は、この男をまた私に会わせてくれるだろうか。……わからない。
「私はアイラ様に興味が湧いたので、また来ます」

あるお話の始まり

火と妃と陽と悲の物語

出会いは別れだ

二つ目のお話

私はただ考える

何故私は生まれてきたのかを

私は誰なのかを

「という訳でまた来ました」

来客だと言われ、現れたのは昨日会ったばかりの人。とりあえず、椅子を提供し、自身も彼の目の前の椅子に座った。

「はあ……」

アイラはどうしていいのか、困り果てた。まさか本当にここまた来れるとは、思ってもみなかったのだ。

「あなた様は何者ですか？」

相手の真意を探るように、瞳をまっすぐ見つめると、彼もまた困ったように首を少しだけ傾けた。

少し間を置いてから彼は答えをくれた。

「残念ですがただの軍人です」

「何が残念なのですか？」

「あの……？　家柄の話ではないのですか？」

「家柄？　家に柄か何かついているのですか？」

「いえ、そういうわけでは。はは……」

素っ頓狂な返事を返されて、ナシカは困ってしまった。

アイラは、世間というものを知らな過ぎる。この純粋さが可愛く思えるも、どこか悲しい。

苦笑いをする彼を見てどうするべきなのかを、アイラは見失った。
自分の話の能力のなさに苦い気持ちになる。
彼を喜ばせることができたら、傍に居ることができるのだろうか。
いや、と思う。
変な希望を持ったら、それこそ奪われていく。
「ああ、そうだ。私のことはナシカとお呼び下さい」
「えっ、あっ、はい。」
突然の申し出に驚いてしまった。
「アイラ様は」
「私のことはアイラとお呼び下さい。私もナシカと呼ばせていただくのですから」
ナシカには、口の端をわずかながらに緩めているのができた。
アイラは、嬉しかったのだ。
「よろしいですね？」
その上品な笑みに、ナシカは顔が火照るのを感じた。元々、あまり表情に出ない人種だったため、アイラは気がつかなかったのだが。
こういうところを見ると、やはり姫様なのだなとナシカは思った。
「アイラは何でこんな場所から出ていけないのですか？」
「父と母の命令ですから」
アイラは、自分で言った言葉に対して吐き気を催した。
――あの女を母などと呼んでしまった。
自分の境遇、おかしな両親。悲しさだけ、感じる。
「アイラ……」
ナシカが手を伸ばしてきた。
その手は、一度だけ躊躇った様に宙で止まり、そのまま伸ばされた。髪に触れるか触れないかの感触があり、頭を撫でられたのを感じた。
「今日の服はおかわいらしい」
「そうですか？」
言われた内容は脈絡がなく、アイラはきょとんとした。

自分の服を見る。服だけはきちんとしたものを与えられる。
今日は濃紺のドレスだ。腰に大きなリボンが付いており、それに合わせて同じようなリボンがエナメルの濃紺の靴に付いている。
「お綺麗です」
優しげな目線で見られて、気恥ずかしくなり俯いた。そして、満面の笑顔で言った。
「ありがとう」
そんな言葉に、彼は一瞬呆けた後、下を向いて何かを考え始めた。
アイラは彼をじっと見つめてみた。
まつげは長く一見女の子のよう。ただ紳士であるし、剣の腕もたつらしい。女性から、目をかけられそうな容姿だ。世情に疎いアイラが思うのだから、よっぽどなのだろう。
唐突に黒い感情が駆け抜け、そして思った。
知りたい。
彼が何者なのか知りたい。
「ナシカは何が好きですか？」
アイラは、こんなことを人に聞くのは初めてだったのだが、彼のことが知りたくてたまらなかった。
そして、一抹の不安を覚えた。もしかして変なことを聞いたのではないか？
俯いていた彼の顔をちらりとみてみると、不思議と落ち着いた彼がいた。とても、暖かい微笑みを向けて、アイラを見ていた。
「何と言われましても……困りますね。しいて言えば、大根かな？」
「えっと、大根ですか？」
好きなもの、と聞かれて「大根」という返答を返してくる人は少ないのではないかと、アイラでさえ気づいた。
変わっている人だ。
私なんかに会いにここまで来る、変な人なのだ。
「アイラは？」
私の横に移動し、上目遣いで見上げてくるナシカにアイラは答え

た。
「私は……パセリです」
その後、多愛もない話を交わし、一刻もしないうちに彼は帰っていった。
時間が過ぎるのがこんなに早いなんて。
どきどきと胸がなる。また、会いたい。
「また一人……」
「あら、アイラはいつも一人じゃないの。」
はっと、振り返ると、あの女が壁に凭れ掛かっていた。
「……」
今日は悪い日じゃなかったな。明日もこうだといいのに。

＊＊

「やはり女王が魔女だというのは本当か？」
城の一角でこんな話が行われていた。
「まだ確かではありません。ただ……」
「ただ？」
彼は間をおき、ゆっくりと言葉を述べた。
「私はなんだかそのような気がしてならないのです」
どこか不安げな、悲しげな表情を浮かべた。
その会話をしている一人は、ナシカだった。

＊＊

「またまた来てしまいました」
「ひゃっ」
考えごとをしていたらしく、後ろから現れた私に驚いたアイラ。
なかなか新鮮な反応だなあ。そんなことを考えていたのが顔にで

たのだろうか。少し怒ってしまわれた。
「可愛らしい」
とても困った顔をしている。
「あのぅ……」
「くくっ、すみませんね。」
笑いがこみあげてくる。
私にもこんな感情があろうとは。まさかな。私は血を自ら浴びて生きている。同族を恨むわけではなく、ただ飢えを満たしていたのだ。この姫は何も知らない。私が〈黄金色の悪魔〉と呼ばれていることも、人を何人殺したか……も。
これからするひどい仕打ちも。
「ナシカ？」
名前を呼ばれることの喜びも。
彼女は知らない。
「すいません。何でしょうか？」
「考えごとですか？」
ちょっとしたことで疑問を投げかけられることだって嬉しいことを。
彼女は知らない。だが、私だって、このお姫様のことを知っているわけではない。
「ええ。少し」
そっけない返事だとは思った。とっさのことだ。
だが、彼女は笑顔で応えてくれる。
「考えるってすごいことですよね。」
「は？」
突拍子もないことを言われ、動揺する。
何が言いたいのですか？
「人間はすごいですよね」
眼が輝いている。こんなアイラは初めてだ。色々な表情を見せてくれるようになった。まだ、会って間もない私に、彼女は心を許し

てくれているようだった。
それが嬉しいのに。
嬉しいから、彼女のことをもっと理解したいのに。
まだ理解できていない私を見て、彼女はうつむいた。
「何でもないです」
さらによくわからなくなってしまった。何が言いたいのだろうか。
「もうお帰りになる時間でしょう。さようなら、ナシカ」
「はい。失礼いたします」
追い出された気がするが、仕方ないだろう。私が悪いはずだから。

＊＊

「アイツは帰ったの？　アイラ」
「はい、帰られました」
あまりこの女にあの方を近づけたくはない。
私があの方に少しでも好意があるとわかれば、きっと何かしてくるだろう。
「そうですか。では、あなたの父に会わせてあげましょう。感謝なさい」
「ありがとうございます。」
私の牢の壁には骸骨と十字架の絵が飾ってある。
黒と朱と白で描かれた絵。この後ろには、王座につながる道がある。
女が、絵を左右に分けると、扉があった。
この向こうには、父がいる。
私を愛してはいない、だけど会いたい、愛して欲しい、そんな父が。
「行きなさい」

先に進めことはできるけど
私はいつでも立ち止まる
後ろは振り向けないから
ただ一歩踏み出そう

愛と間と哀と曖の物語
悲劇は喜びだ

三つ目のお話

分かっているつもりだった

父が私を愛していないことくらい

全然平気だった

私は平気

豪華な間だった。

ここは裏隠しの間と呼ばれる部屋である。　中央には円卓の騎士を思わせる丸い机が置いてあり、王座には金、銀などが散りばめられた椅子がある。赤い絨毯ももちろん健在だ。

「お前がアイラか？」

愛情なんか全く感じない声。低くて、がっしりしていて、意志の強さが窺わさせられる。

そんな声。私はわかっていたから、

「はい。そうです」

つらくなんか無い。

＊＊

部屋の雰囲気を察して、挨拶をするナシカ。

「おはようございます、アイラ」
いきなり彼女は癇癪を起こした。会ったのは数回だけだったが、今までに無かったことに少しだけ驚いた。
「ねぇ、ナシカ。敬語はやめて！」
「あなたが望むなら」
彼女は押し黙ってしまった。ごめんなさいと呟くのが耳に届く。
髪は顔を隠していた。何気なく顔にたれている髪をすくい上げる。目蓋は濡れ、赤く腫れ上がってしまっていた。
「私には、あなたしかいません」
そうとだけ言って、後は沈黙が流れた。
暗い喜びがあった。
ナシカは、悲しそうな顔をしているアイラを見て、捕らえられた。
ああ、堕ちるとはこういうことを言うのだと知った。
「泣かないでください」
でも、私を見てください。
「私にも、アイラだけだ」
あなたが望むのなら、敬語だって止めるし、何でも手に入れてやりましょう。
「ねえ、アイラ」

「お話をしましょう」
そういって彼は、彼女に淡々と話し始めた。

あるところに一人のお姫様がいました。
可愛らしく、素直なお姫様。
そのお姫様は意地悪な継母に何もかもを取り上げられてしまいました。
地位、財産、そして父親さえも。
ただその継母は命だけは取らなかったのです。
ただいじめるためだけに。

実はその継母は悪い魔女だったのです。
国王を操り、自分の世界を作り上げようとしていたのです。

ある日継母はお姫様に一人の男と会わせました。
お姫様の婚約者だと言って。
その男は地位はありませんでしたが、騎士でした。

ある日、泣いているお姫様を見てその騎士は心の中で誓いました。
私は彼女を愛している。だから命尽きるまで戦おうと。

少したちました。　その日は町のお祭りの日。
町はざわざわとしていて活気がありました。　その日に革命は起こったのです。
その継母に対抗した騎士団です。

騎士団は継母に勝つことができるのでしょうか？
それとも、死ぬだけなのでしょか。

「続きはわかりません」

彼の話は終わった。そして彼は部屋から出て行った。
明日は祭りの日。アイラはただ呆然と、彼の後姿を見ていた。
「ナシカ……」
傍に居て欲しい。けれど、止められなかった。

詩と史と志と死の物語

決意は裏切りだ

終わりのお話

祭りの日

どこにいても同じ

私は不幸でしかいられないのだから

そばにいて

何が言いたいの？

言葉では伝わりません

ナシカ

あなたは何をしているの？

朝が明けようとしている頃に3発の花火が打ち上げられた。
一発目は控えめに。二発目はみんなを起こすように。三発目は盛大な祭りの始まりを告げるように。
さあ、お祭りの始まりだ。
この音でアイラが目覚めた。はっとした目覚め。今日で何もかもが終わろうとしている。
自分はどうなるのだろうか。ナシカは私を助けにきてくれるのかな

？　不安な要素ばかりだったけれど、どうしていいのか途方にくれた。

＊＊

ナシカは目を閉じて花火の音を逃さないように聞いていた。目を開けると穏やかに包み込む広大な大地があった。

全てはアイラのために。彼女のために動こうとしていた。

あの薄汚い魔女を倒すために何百人もの優秀な騎士たちが集った。ナシカの人徳はすごかった。

眼下を見下ろすと吟遊詩人が歌っていた。こんなところいるのは不自然であるが、祭りの日だ。何があってもおかしくはない。

人々は浮かれる

何もかもを知らずに

僕は唄うよ

大切なもののために

涙と血の流れる大地

穢れは払うことができないから

時間をかけて償おう

昼になる。
「出撃！　剣と盾を持つ我ら騎士団。魔女の首を取る！」
今まで隠れていた騎士たちが歓声を上げて突入した。いきなりの襲撃にあっけなく敗れ去る城を守る兵士たち。
「魔女は奥だ！　進め！！！」
ナシカの声はよく響いた。
「行くぞ！」
走る。走る。風のように。
私には何が必要か？　そんなことは簡単だ。魔女の首だ！
思い切りドアを蹴飛ばすと、金具がはずれそのままそのドアは吹き飛んだ。
「女王様！　命を頂戴に預かりました」
恭しく礼をするものの、その瞳には侮蔑の色しかなかった。
この人が、アイラを苦しめているのかと思うと、叩き切ってしまいたくなる。
「……無駄よ。私を殺せる人間なんていないわ」
あまりに落ち着いた様子をする彼女を見て、ナシカは笑みを浮かべた。
あなたは何もわかっていないのですね。
「私は半分は魔族ですから、あなたは滅ぶ」
この瞬間、何が起きたかわかるでしょう？
魔女の顔がだんだんと醜いものに変わり行く。今までの栄華が嘘のように。
「終わりですね」
やっと、彼女は解放される。
「やめっ！」
剣を振りかざす。もちろん普通の剣ではない。魔女を斬るためだ

けに作られた剣だ。赤い宝石の埋め込まれたその剣は、血を浴びてさらに赤く怪しく光り輝いた。
「この血に終わりなんかないわ」
魔女はそういうと死に絶えた。

心は失われることは無いと思っていた。

全ては間違いだ。

穢れは全てを包み込み、死へといざなう。

＊＊

「アイラ！」
何名かの兵士と一緒にアイラの檻を取り壊した。
一人の兵士はナシカに問い掛けた。
「この方が姫様なのですね」
「ああ」
アイラはきょとんとして周りを見回す。
こんなに人を見たのは初めてだったのかもしれない。ナシカは少しだけ切なくなった。でも、これからは違う。一緒にいられるんだ。
「ナシカ？」
「一緒に、ここから出てくれないか？」
その言葉に、アイラは嬉しくなって、笑顔でうなづいた。
「じゃあ、あの話の続きを聞いてもいいですか？」
「いえ、少しだけ待ってくれないか。ほんの少しだけ。」
「何故？」

純朴な目で見られて、心臓が跳ね上がる。
ああ、これが幸せだと、ナシカは胸にこみ上げてくる熱いものを感じた。

「あなたとこれから作っていこうと思うからです」

勇気と真実と闇と心の物語。
終わりは始まりだ

吟遊詩人の歌はこれで終わりです。

本当の終わりの物語

何故ナシカは魔女をやっつけることができたのでしょうか？

「それは私が魔族だからですよ」

ナシカは快活に話した。そんな彼を見て、私はとても心が温かくなった。

素敵な人、だと思う。

ずっとその笑顔を見ていられたら、それだけで良い。

「アイラ、今何を考えている？」

「え？　ナシカのこと」

「ずるいですね、本当に」

ナシカは、「そんな顔をして私のことを考えるなんて」と呟き、唇を寄せてきた。まだ、この行為に不慣れなアイラは、ぎゅっと目を瞑ってしまう。

そんな彼女を見るたびに、彼は優しく頭を撫で、頬へとキスをするのだった。

「可愛い」

耳元で呟かれ、アイラの鼓動が未だかつてないほど、早鐘を打つ。

「あ、あ、あの。それってつまり、ハーフってことですよね？」

アイラが問いかけると、彼は苦笑をもらした。

「そうなりますね」

「魔族って素敵な響きですね！」

焦った彼女は、やはり可愛い。

ナシカはもう一度、頬に唇をよせた。

「そうですか？」

アイラの見えないところで、彼の瞳は少しだけ影を得た。

「厄介ですよ、結構。私は人間の血が入ってましたからどちらからも受け入れてもらえなくて……」
彼は優しく笑いかける。
「あなたの父に助けられたのです」

私は嫉妬をする

それはそれは大きな

でも、どちらに対しての嫉妬だったのだろう。
「あなたは陛下に愛されています」
突きつけられた現実はそれはそれは重いものだった。
「あのお方は魔女に操られてはいなかった。だけど、ずっと脅されていたのです。何か魔女邪魔をしたら、アイラを殺すと脅されていたそうです」
彼は少し間を置いた。
アイラの表情は凍りついたまま動くことはなく、ただ一点、目の前の壁を見つめているだけだった。
「アイラと食事をしたときはひどく心を痛めておいでだった」
「嘘よ！」
彼女はずっと溜めていたものを吐き出していった。
「お父様は私のことを愛していないから……だからっ。だから、ナシカは私のことを傷つけないために嘘を言っているのでしょう？」
声は枯れ、涙まで出てきた。
だが、その激情をみてもナシカは声色を変えることなく微笑んでいた。
「違います」
その会話が行われてから彼女の心は羽ばたき始めた。
やっと狭い牢から抜け出した。

「愛しています、ナシカ」
彼はにっこりと微笑んでから答えを返した。
「もちろん私も」

しかし、終わりは全てではない。
たとえばこんな話。

「娘を魔族なんかの混血にやるわけにはいかない。」
ずるがしこい男は、この国で一番偉い方にひざまずく。
「もちろんですとも」
「魔族の血が入っているから生かせておいたんだ。魔女を倒すためにな」
男は、娘のことを想い、間違いを犯し始めていた。
彼女を想うあまり、彼女の幸せを理解できていなかった。
「お前にまかせていいな？　ナシカを……娘から離してくれ。」
一つ物を手にした者は傲慢となる。それは一つ試練を乗り越えた者も同じだった。
「おおせのままに」
こうして間違いは間違いのまま進んでいく。

騎と姫と奇と記を記す物語

始まりは終わりだ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0430a/

十字の時計

2010年10月8日11時47分発行